

大善寺不動明王像

—県下最大級の画像 修理後寺外初公開—

令和元年 5月25日(土) ~ 6月24日(月)

山梨県立博物館
Yamanashi Prefectural Museum

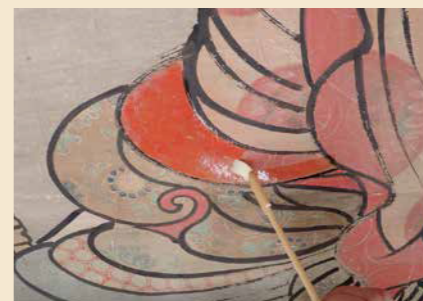


大善寺本堂(国宝) 鎌倉時代 正応4年(1291)

【修理の工程】



3 画面の欠失箇所の補修
絵が描かれている紙と同質の補修紙を作製し、欠失箇所などを補っていきます。



2 絵具の剥落止め
作業を進めていく上で、現在残っている絵具が落ちないように、膠(にかわ)水溶液を使って剥落止めを行います。



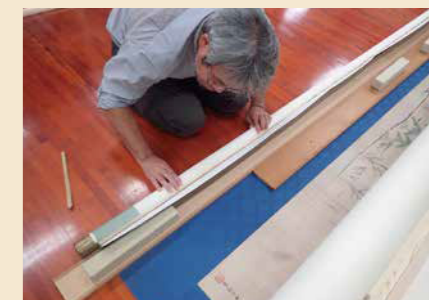
1 掛軸の解体
掛軸を解体し、絵の部分を取りはずします。



4 肌裏打ち
作品を保護するために、裏側に和紙を何層かにわたり貼り込みます。この作業を裏打ちと言います。最初に裏打ちを施すことを肌裏打ちと言います。

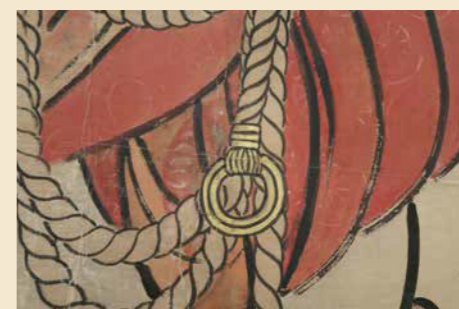


5 補彩
補修紙を補った部分が全体に馴染むように、補彩を行います。



6 仕上げ
掛軸の形に仕上げしていきます。

【修理前後の比較】



修理後
綱索部分。強い横折れが改善されました。



修理前



修理後
火炎部分。汚れが薄くなりました。



修理前

不動明王像を守り伝える

修理の記録にあるように、大善寺の不動明王像は平安時代に描かれてから修理を重ねられ、江戸時代には模写が制作されるほどに必要とされてきました。このほど、平成二十九年から三十年にかけて、江戸時代の不動明王像の修理が行われました。修理は専門家の手によって慎重に進められ、画面全体の強い折れや、汚れが改善され、不動明王のあざやかな姿がよみがえりました。仏の姿を描いた絵画は尊い信仰の対象ですが、先人が残してくれた大切な文化財でもあります。次の時代へ文化財を受け継いでいくことの大切さをも、この不動明王像は私たちに語りかけてくれているのではないのでしょうか。

大善寺の不動明王像

甲州市勝沼町にある大善寺は、その創建が古代に遡るとされる県内有数の古刹で、平安時代の有力氏族・三枝氏ゆかりの寺院として知られています。鎌倉時代・室町時代を通じて幕府・鎌倉府の祈禱所であり、その後も戦国時代には武田信玄、江戸時代には徳川將軍家などの庇護を受け、今に至るまでその法灯をつないでいます。

大善寺には、国宝である本堂をはじめ、平安時代九世紀頃に作られた本尊・薬師如来像(重要文化財)など、たくさんのお宝が伝わっています。その中に、江戸時代に描かれた、縦四五〇cm、横三三〇cm程にも及ぶ、とても大きな不動明王の画像があります。これは、同じく大善寺に伝わる平安時代十二世紀頃に描かれたもう一幅の不動明王の画像を、文化四年(一八〇七)に横田汝圭という画家が模写したものです。

平安時代に描かれた不動明王像は絹地に描かれており、現在では細かい内容までははっきりとわからない状態となっています。しかし、この模本が伝わっていることで、私たちは平安時代の原本の様子をうかがい知ることができるようになりました。江戸時代の模本は紙に描かれており、原本と素材は異なっています。しかし、像の胸元や腕に着けたアクセサリなどの形、淡い色合いで繊細に美しく描かれた衣の色彩感覚など、平安時代の原本の雰囲気や細かく伝えていると考えられます。

また、平安時代の原本の裏側には、江戸時代の延享五年(一七四八)にまとめられた修理の記録が遺されています。それによれば、鎌倉時代の嘉元四年(一三〇六)をはじめとして、室町時代の延徳元年(一四八九)、江戸時代の寛永十二年(一六三五)・延享五年と四回の修理が行われています。八〇〇年以上にわたって繰り返し修理を施し、さらに文化四年に新たに模本を制作していることを考えれば、この不動明王像が、いかに大切なものと考えられてきたかがわかります。

主な参考文献・資料

- 有賀祥隆『仏画の鑑賞基礎知識』至文堂 1991年
 - 『山梨県史 文化財編』山梨県 1999年
 - 田中義恭/星山晋也編著『目で見える仏画 完全普及版』東京美術 2000年
 - 伊藤信二『大きな仏画を掛けること—日本仏画の例を中心に—』『トビック展示 巨大掛幅をめぐる文化交流—祈りと暮らしのかたち—』九州国立博物館 2010年
- ※大善寺不動明王像二幅の制作時期や作風・彩色に関する見解については、有賀祥隆氏(山梨県文化財保護審議会委員)よりご教示いただきました。

山梨県立博物館 シンボル展
大善寺不動明王像
—県下最大級の画像 修理後寺外初公開—
編集・発行 山梨県立博物館
〒406-0801 山梨県笛吹市御坂町成田1501-1
電話 055-261-2631

出品者、写真撮影・提供、協力者(敬称略) 柏尾山大善寺、株式会社修美、有賀祥隆
本リーフレットはシンボル展「県指定文化財 大善寺不動明王像」(令和元年5月25日(土)~6月24日(月))の内容を紹介したものであり、展示資料をすべて掲載したものではありません。本文の執筆・編集は近藤暁子(当館)が行いました。
印刷 株式会社 内田印刷所 〒400-0032 山梨県甲府市中央2丁目-10-18 電話 055-233-0188

不動明王とは？

不動明王は、弘法大師空海により平安時代に本格的に日本にもたらされた密教の尊像です。古くは密教の中心的存在である大日如来の使者として、『大日経』などの經典に登場します。これが発展して、仏教の教えを理解せず従わない人々たちをも強い力で教え導くために、大日如来自らが姿を変えて現われた存在と考えられるようになっていきました。そのため、力強く恐ろしい姿をしており、武器なども手にしているのです。

不動明王に対する信仰は、古くは大日如来の化身として鎮護国家を祈願するものでした。しかし、やがて病氣平癒や政敵打倒など、貴族たちによる個人的な祈願の対象にもなり、より多くの人々の間に広まっていったのです。

信仰が広まるにつれ、不動明王の彫刻・絵画は数多く作られるようになっていきました。その姿は、九世紀頃は空海が中国からもたらした形に基づいて、多くは両目を見開き、上の歯で下唇を噛む姿で表されました。その後、九世紀末から十世紀の初め頃に、天台宗僧侶・安然や真言宗僧侶・淳祐によって、不動明王の姿の特徴を示した「不動十九相観」が説かれるようになります。それをもとにした姿のものが作られるようになり、その特徴は、右目を見開いて左目を細め、右下の牙を上、左上の牙を下に出す表現などがあります。

大善寺の不動明王像は、右目は大きく見開く一方で左目を細め、右下の牙を上、左上の牙を下に出す姿をしており、「不動十九相観」に従って描かれていることがわかります。

不動明王の姿

それでは、大善寺の江戸時代に描かれた不動明王像について見ていきましょう。

不動明王は顔をやや右に向けて、岩坐の上に座っています。右目を開き、左目を細める様子は、上と下、すなわち天と地を同時に見る「天地眼」とも呼ばれます。右手に剣、左手に綱索を持ち、剣は両側に刃のついた両刃の剣、綱索は先端に重りのついたいわゆる投げ縄で、不動明王は、この剣で邪悪や煩惱を断ち切り、綱索でそれらを捕縛するのだといえます。明王をとり囲むように描かれる火炎は迦楼羅炎^{かろうらえん}と言い、インドの伝説上の鳥・迦楼羅^{かろうら}（金翅鳥）の姿で表されます。頭髪は巻毛で、頭上に莎髻^{しゃげい}（莎^{しゃ}ハマスゲ）という植物で結った髪束のこ^ことを結び、左側に弁髪を垂らしています。莎髻の数は、悟りを得るために必要な七つの方法を示しているといえます。額に皺を寄せ、顔には恐ろしい表情を浮かべています。体の色は青色で、肉付きの良い太った体つきをしているのは、大日如来の使者として子どもの姿をしていると考えられたためです。

これらはすべて「不動十九相観」に示される特徴です。十九相観には「不動明王の化身である竜^{りゅう}（俱利迦大竜^{くりにかたいりゅう}）が剣に巻きつく」「矜羯羅^{きんか}・制吒迦^{せいたか}という二人の童子を従える」などの特徴もありますが、この絵では表されず、不動明王のみが画面いっぱいに描かれています。岩坐の下には松や桜とみられる樹木が小さく描かれ、明王の大きさを一層際立たせているかのようです。不動明王像は岩坐の周辺に水波を表すものが多いですが、ここではそれも描かれていません。これは、十一世紀に描かれた十九相観

に基づく最古の作品とされる京都・青蓮院の《不動明王三童子像》（国宝）と通ずる特徴で、この絵の形式の古さを物語っています。

また、上半身左肩から右脇腹にかけて、条帛^{じょうびやく}と呼ばれる布をたすき状にかけ、下半身には袴と呼ばれる衣の上に、縁がフリル状の腰布を着けています。よく見ると、布の裏と表で模様や色を使い分けていることがわかります。胸には胸飾り、二の腕には臂釧^{うでぐし}、手首には腕釧^{うでぐし}と呼ばれるアクセサリーを着けています。衣やアクセサリーには、花の形をもとにしたデザインが使われていて、恐ろしい姿とは対照的な優しい気な感じも印象的です。

画面向かって右側には、「文化庚午仲冬日／復庵汝圭拜慕」と記されており、いつ、誰によって描かれたかがわかります。汝圭とは、江戸時代後期の画家、横田汝圭のことで、鳥越明神前（現東京都台東区）に住んでいたとされています。

大画面仏画の持つ意味

大善寺不動明王像については、同寺の年中行事を記した享保十三年（一七二八）の文書などに、旧暦の七月六日から十五日まで堂内に「不動絵」を掛け、最終日に鳥居火を焚くとの記述があり、江戸時代には孟蘭盆会^{ぼんこん}（お盆）の法要で用いられたとの伝えがあります。しかし、制作された平安時代当初、何のために作られたのかを示す資料は今のところ見つかっていません。

このように大画面に仏像を描いた画像は、どのように使われてきたのでしょうか。平安時代には、国家儀礼としての仏教行

事で使われていたことが当時の記録に残されています。現在、和歌山県・高野山有志八幡講十八箇院^{はちまんこうじゅうはちかんと}には、十、十一世紀頃に作られたとされる、縦が三二〇cm程の《五大力菩薩像》（国宝）三幅が伝わっています。五大力菩薩像は、「仁王会」と呼ばれる国家鎮護を祈願する法会の本尊で、国家規模の儀礼が必要とされた画像のスケールを感じ取ることができそうです。

また、平安時代の後半になってくると、有力貴族たちも自分が建立した寺院で大きな画像を用いて法要を行いました。藤原道長は、自身が建立した法成寺で、後一条天皇の病氣平癒を願い、大日如来をはじめ、様々な仏像の画像を用意しました。その大きさは二丈六尺（約四八〇cm）と伝えられています。

大善寺不動明王像の大きさは現状で縦が四五三cmですから、二丈六尺の画像とほぼ同じ大きさです。平安時代の原本に残されている修理の記録には、この絵が一条天皇（九八〇〜一〇二二）の頃に描かれたとの伝承も記されています。伝承ではありませんが、十一世紀は有力貴族により大画面の仏画が盛んに制作された時期でもあり、興味深く思われます。国家儀礼や有力貴族の仏教行事で求められた画像の大きさは、その儀礼が持つ権威や、行事を行う人物の力の大きさを反映していると考えられます。この画像の存在は、当時の大善寺とそれを支える三枝氏の勢力の大きさを物語っているといえるでしょう。

